

1 マスク

暑い夏マスクつらいよ外したい
寒い冬マスクの中は水たまり
雪の色みんなのマスク同じ色
夏の時期マスクと半袖似合わない
新学期みんなの顔が分かんない
花粉症マスクなしでは生きれない
冬の時期つけるマスクがあつたかい
マスク越しそれでも甘い金木犀
感染症マスクが必須今の時期
サンタさんマスクをつけてやってきた
大雪でマスクつけたら白だらけ
マスクたち秋風とともに全国へ
水族館イルカショー見てぬれちゃった
お気に入り桜とおなじピンク色
暑すぎてマスク忘れてアイス食う
マスク焼け顔の模様が面白い
卒業式顔も見えずにかなしきかな
新クラス覆い隠せる硬い顔
クラス替えマスク外すの緊張だ
桜匂うマスクつけてもフワフワと
寒い冬マスクのひもで耳痛い
あつついなマスクつけるのあつついな
夏休み海に行ったらマスク焼け
冬の時期マスクもひとつの防寒具
マスクさえ可愛さ気にする女の子

2

たづね人

新聞のたづね人欄春しぐれ
子安貝に耳かたむける波おぼろ
ため息の宙にはじけて石鹼玉
蝶生まる令和の城の大修理
夏来る鞆の底のパトローネ
籐寝椅子まつげの影の動かざる
ぼうふらの耀いてまだ死ねぬ夜
すれ違ふ人それぞれ道薰衣香
純白の献花うなだれ終戦日
コロツケの半額シール鰯雲
舌尖に残る苦みや青みかん
眠る子のつむり撫でやる菊枕
薑やひとりごとのみ響く夜半
袖口の冬の蚊の肢からまりぬ
火恋し喪中葉書を束ねけり
刑務所の庭に降り立つ寒鴉
てのひらの蜜柑一顆の日差しかな
逢える日を指折り数へ日脚伸ぶ
日向ぼこ気に病むものは無しとする
夜通しの風にゆづらず寒椿
木枯らしや視線の合はぬふたりづれ
運動は無限の静止独楽廻し
初水の先づは火影に染まりをり
落葉焚き運命線のながきこと
坪庭の眠り百年福寿草

3

テスト返却

外は白私の手元は赤の丸

赤点で私の心は雨模様

暑い夏返却されて凍えたよ

桜咲く返却されて桜散る

達成感それと同時に春が来る

この紙は焼き芋と一緒に燃やす予定

あの人は涼しい顔して高得点

100点を取って増えたよお年玉

時止まる赤点を見て風鈴が鳴る

期待して椿のように落ちていく

竜巻にこの紙投げておさらばだ

褒められて心に桜咲きました

ビリビリに破いて海に沈めたい

赤点で私の心は大雨だ

少しずつ成長感じる年の暮れ

返却日今夜のメニューはウナギだぜ

点数はもう気にしない海に行こう

夏期テスト焦りでもっと暑くなる

親に見せ褒められ嬉しい夏の夜

自らの実力を知る新年度

帰り道雷と重なる母の顔

このテスト暑いからって燃えるなよ

風が吹く答案用紙飛んで行け

おばけやしきみたいにさわぐテスト返し

冷える手で落とさぬように受け取る用紙

4

パラレルワールド

朝起きてさよなら夢で釣った星
朝起きて目覚まし時計とつった足
東雲の体を揺らす特急列車
つり革と重い荷物と加齢臭
春風にあの子の背中斜め前
一限目眠気とやる気の押し相撲
振り向いて交わす議論に熱帯びる
手を挙げる勇気がなくて魔女通る
デザートはビタミン色の夏みかん
売店の揚げパン手前で売り切れた
フルチャージ苦手科目も筆走る
チクタクと追いかけっこの遅い午後
悪ふざけ滑って広がる笑い声
先生の声が遠のく六限目
大技や歓声聞いて知る成功
まめむけて激痛走る手の消毒
金曜日帰る足取り皆軽く
月明り照らす手元の単語帳
ちゃんこ鍋つつく箸で談笑す
課題終われ時よ止まれと願う暮れ
しもやけと手と手つないだ雪景色
布団の中体勢探し一苦労
夢に見るおとぎ話や我が憂き世
過ぎし日々斗折蛇行は無駄方便
春陽やどんな明日をも越えて行け

5

マスク

花粉症マスクが大事命綱

コロナ禍マスクもおしゃれの一部です

初対面マスクの下を予想する

鼻マスク感染予防の意味はなし

誰だろうマスクの色であの子かな

あの人のマスク外した顔見たい

公園にピンクの桜同じ色

迎春でマスクのセール人だから

アルバムの中は全部マスクだけ

顔色が白やピンクで色とりどり

登下校湿気のせいでびしょびしょに

耳が痛いマスクのせいで中耳炎

コロナ禍で夏でもマスク暑苦しい

蝶がまいマスクの柄に溶け込んだ

雪だるまみんなと一緒に風邪予防

花粉症マスクと眼鏡大切だ

コロナ禍でマスクの義務化うんざりだ

炎天下マスクの下は汗だくだ

二年前マスク生活始まった

顔見えず相手の感情読み取れず

雨が降りマスクびしょ濡れ雨宿り

コロナ禍でマスクをしないと命がけ

冬の時期マスクと眼鏡は無相性

アベノマスク需要高まり取り合いに

リモートでなぜかマスクをつけてる

6 駅

かじかんでつり革上手く掴めない
白い息ホームが滑る冬の駅
冬の日待合室が激混みだ
梅雨中は遅延祭りだ大遅刻
電車待ち話すたんびに白い息
熱い外逆に風邪ひく温度差だ
最寄り駅久々に会う地元の子
雪降ると遅延多めで皆困る
遅延するそれはなぜなの雪のせい
飛び込みで自殺者多数5月ごろ
ピンク色窓から見える桜だな
線路には紅葉がたくさん秋の風
12月遅延が多発雪のせい
寒い中待っている足凍えそう
部活後の満員電車汗すごい
かじかんでマナカを出すのでこずるな
暑い中乗り込む電車涼しいな
外は冬満員電車でぬくぬくと
ホームにて天井見ると雪積もり
暑い中少し涼しい若葉かな
桜咲き動く車窓に肩弾む
最寄り駅遅刻寸前息白し
遅延とは雪が降るとおこること
秋になる駅のベンチが寒くなる
春になる電車の中桜色

7

鉛筆

鉛筆を落として始まる桜吹雪

4月の日心入れ替え新学期

小さな手収まりきらない大きな木

受験生えんぴつ忘れパニックだ

受験生えんぴつ転がし運試し

桜散る鉛筆で書く花卉を

手紙書くあなたと私の青春だ

恋をした温かみのある君の文字

春迎え桜の花びら書き写す

前日は受験に備え早寝する

朝悔やむ削り忘れた鉛筆に

鉛筆の限界挑む小学生

えんぴつが縮んでいくよ夏休み

ふと思う短い鉛筆どこだろう

スケッチを取れば取るほど尖っていく

心折れて心も折れたテストの日

波の音一人木陰でスケッチを

三学期鉛筆たちの身長差

かじかんだ右手で握る鉛筆を

鉛筆に馴染むと共に丸くなる

鉛筆で君への思いしたためる

鉛筆でスケッチをするたんぽぽを

一斉に赤えんぴつで丸つける

朝起きて鉛筆片手に朝日描く

鳴り止まぬ鉛筆の音テスト中

8

俺たちに春は来ない

アイステイ移ろいゆける温度の差
五線譜を描く蛍の集いかな
水上に根強く座して蓮の花
炎ゆる地に刹那が影を残したり
八月の暗僕のムンクは叫ばない
風鈴は瓦礫となりてキノコ雲
立ち読みの挿絵の中も風白し
初嵐黄に橙に色付いて
スカートと落ち葉のワルツくるりら
満ちる月小路寄り道未知の道
かくれんぼかくれんぼして無月かな
朝寒や空の高さを測り行く
秋夕焼揺れる一葉の落とす影
サックスに映る五線譜秋の暮れ
炬燵の夜テレビ横目に舟を漕ぐ
鮫鯨の骨身に染みる味噌の味
風花と迷い子辿る母の胸
白銀を自由気ままに子供達
望郷の友待雪に道尋ね
雪うさぎつぶやく声を聴きとりぬ
駆ける兎ら雲雀殺に胸躍る
私にも中原中也の雪が降る
セーラー服不香の花はコルサージュ
生まれたてほんのり赤い寒椿
涙声雫浮かべる落ち椿

9

書き出し

鉄塔に深き傷跡春の蝶

綴るごとくに薄氷の出来上がる

廃校舎いま春塵の部屋となる

春炬燵この恋文を捨てられず

校庭の砂利硬かりし風光る

気苦労を桜が隠しゐる通り

小満や傘より腕のつめたくて

折り紙はしづかに力み立葵

うつすらと亀に唇ある夜涼かな

ほそぼそと蕎麦屋のつづく夾竹桃

感想の難し帰省子の知育菓子

花よりも水透きとほる昼寢覚

書き出しのとみに定まる夜食かな

山粧ふ脚立を出してゐる隣家

吸ひ殻はみな火の犠牲きりぎりす

鈴虫や地盤のゆるき町の昼

猛犬の尾のなまぐさき野分かな

乾ききる前の小径や金木犀

ねんねこや板チョコの割れ目は斜め

ネギは剣子につはもの目があれば

みどりごの柚子湯を猫に覗かるる

電器屋の列にぎやかにクリスマス

福引の当たらぬが身の丈にあふ

凍滝をとほく校倉造かな

異国語の飛ぶ一月の池袋

10

あくびのいろ

猫の恋「の」の字に茶筌そつと書く
黒板の全てを消して牡丹の芽
薄氷掬いて落つる雫かな
食パンの耳やはらかし初桜
鞆を漕げども蹴れぬ己が影
イヤホンに結び目ひとつ春の虹
トロツコの大きく曲がり春の果
父に負けさうな将棋や麦の風
はりついてあたたかな目の守宮かな
ささやかな嘘を麦茶と流し込む
校庭のソーラン節や昼寢覚
ほうたるはたれもあくびをしてをらず
蟻の列着々と堤防を越ゆ
三遊間抜けてゆく球雲の峰
休暇明指より長きチヨーク落つ
秋晴やビルは日光むさぼりて
刁刁と色なき風の空き家かな
スカート裾の絵の具や文化の日
放課後の音楽室の金翅雀
愚痴聞いてもらふ蜜柑をすすめつつ
湯の匂ひ水の匂ひや年用意
底冷や画鋏めり込む掲示板
小春日やナイフに沈むパンケーキ
雪景色ひしめくガリレオ温度計
掛けくれし人も毛布に眠りをり

1 1

アプリ

インスタの交換盛んな入学式

夏の課題 Google に頼り終わらせる

春休み友達探す Twitter

紅葉の綺麗な写真アップしよう

初詣おみくじあげるストーリー

入学式初めて入れる LINE アプリ

待ち合わせ地図アプリ見る落ち葉道

電車待ちかじかむ指と単語アプリ

モンブランインスタ開き1時間

受験期間気になる LINE 通知音

冬休み一日こたつで YouTube

ストーリーの更新盛んな入学式

ネットフリに依存注意な夏休み

活躍が少ないトリマ傘さす日

花の名をアプリで探すよ春の午後

バレンタインレシピ検索 google ㄝ

インスタで卒業証書上げまくる

正月に食べ過ぎ検索痩せ運動

冬休みネットフリ見たくて母に頼む

春になり利用者増えるティンダーの

春の虹見つけてとっさにスマホ出す

桜咲きインスタ盛んに動き出す

咲いたよと母から LINE 庭の梅

次々と地元の豪雪 LINE 来る

明日の空告げるアプリがコート出し

12

ギガ

入学式私の友達スマホだけ
新学期インスタ交換ギガが減る
ギガがない窓を開けると桜咲く
自粛して家にいるからギガ余る
春来るとスマホ買い替えギガ増える
春になり出会いに夢中でギガがない
使いすぎ容量減っていく夏休み
夏休み幸せ増えてギガ減った
夏休みネットフリ見過ぎてギガピンチ
夏だけは無制限にしてほしい
夏休み遊び過ぎてギガがない
夏休みギガが気になり楽しめない
思い出をカメラにおさめていい気分
気づいたら食の写真でギガがない
秋になり写真を撮ってギガがない
スマホ見て気のない返事怒られる
ギガなくてやることないから憂鬱だ
推しのビジュ優勝過ぎてギガ足らず
旅先で容量へって写真撮れん
月初だが通信制限なんでなの
お正月動画見過ぎてギガが減る
朝寝坊鏡見るよりスマホ見る
使ったら雪と一緒に溶けていく
冬寒い家にいるからギガ余る
スマホをね年中見てたら低速度

13

キンと始める時巡り〜all seasons replay〜

藍染めに使えぬかとぞ花すみれ

騒がしき教室遠く冴返る

頬なぞるあの日の春の曇かな

早朝の惚けし窓に梨の花

山影の風穏やかに孕み鹿

水底に冷光の差す貸ボート

五月雨や欄干の青錆びてをり

世の中は卯の花垣と言はれたり

墨田川の橋のたもとの蛍売

水守る窓の彼方の雲居かな

オクラ切る刃先に宿るやわらかさ

芋虫を転がす子らの影の濃く

送り火や重なる歌の美しき

騒がしき祖父の忌日の秋時雨

コスモスの伝言忘るる風強き

初時雨傘を差し出し松の道

細氷や旅の終わりに友の逝く

芽キャベツと合唱曲に聞きいつて

地に伏してポインセチアよ星となれ

眩しさに天を仰ぐや冬日和

狛犬の頭を叩く初詣

舞ふ袖に花片散るや着そ始

カルピスをぶちまけていざ歌留多かな

絶ふることのなき笑み願ふ千代の春

初空に群れる背中の影を踏み

14

霾るや

立春や教科書にある開きぐせ

霾るや天保とある無縁墓

手を添えて煙に巻かるる庭花火

蚊の名残追ひて一拍二拍かな

時刻表にじむバス停片かげり

路側帯こほりみづ待つ列曲がる

朝焼けや街灯あはくともしをり

百日紅ノートに不等式掠れ

終戦日折りづるのくびかたむきて

東雲や紫苑と見つめ合ふ小径

シリウスの瞬き籠の袖に傷

お手植ゑの松を見過ごす秋日和

仏像のあをき玉眼火恋し

木枯らしの行方を知らず龍馬像

冬の蠅洗濯物に値札タグ

キリストのはりつけ猫の日向ぼこ

初雪や若き絵描きの鼻眼鏡

朝まだき山茶花二輪ほどの庭

白に青混ぜはくちょうの羽ゑがく

慰霊碑に敬礼の翁寒椿

マフラーに鼻先かくす群の黙

サーカスのあと冬薔薇なほかをる

カムチャツカはや明けぬらし去年今年

初枕あなたにも脊髄の在り

若水や骨をかくして生きてをり

15

サビだけの鼻歌

コンタクト世界のふちの消えて春
あと何度歩ける道やつくしんぼ
顎だけの会釈を交はすチューリップ
サビだけの鼻歌乗せて春の風
ひっそりと神輿の眠る朝の蔵
それぞれに香水まとひ電車待つ
窓越しの花火や一合米を研ぐ
母作るカルピス薄き夏の夜
簾よりぢりぢりと飛ぶ夏の虫
夏終わる絵日記は白紙のままに
黄金になびく稲穂やじいやの手
マニキュアに透く深爪や秋湿り
空明かき方へ帰るやつづれさせ
参道の灯りに焼かれ色葉散る
流星のなびく光の静けさよ
永遠のなにかを願ふ星祭
山峡の朝日すひこむ冬の霧
子どもらはからだで笑ふ霜柱
錆色になつたシーソー冬薔薇
景品のぼうしでひとりクリスマス
思ふままピアノを弾きて冬深し
トナカイの虚ろな瞳クリスマス
暖房やダンジョンにいま籠城す
師の賀状ふと怒鳴り声したやうな
幼子の指に繋げるオリオン座

16

スポーツ

甲子園白球おって夏の空
ボール蹴りサイダーを飲みひと休み
甲子園最後の夏に涙する
草野球秋の夕焼けまるかぶり
朝起きて部活のために手袋を
スノボーで夢に向かっていざジャンプ
甲子園暑い日差しにてらされて照らされて
大学生箱根峠を駆け上がる
ウォーキング紅葉見ながら深呼吸
のどけさに合わさりきこえる声だしよ
冬休みほとんど部活で休めない
ジョギングで秋の七草風に揺れる
走りこみ暑さにやられ走馬灯
努力する冬の大会勝つため
紅葉のトンネル走るジョギング
登山にて頂上から見る秋の色
ランニング雪あるときもあせたれる汗垂れる
馬拉ソンをこたつの中でながめてる
腕上がる夏天に響くコール音
動く前寒くてジャージ脱ぎたくない
選手権冬の国立夢抱く
大相撲座布団飛び交う初場所
蹴り納め間も無くすると蹴り初め
夏の日差し視界が歪み意識飛ぶ
ランナーが悠々走る箱根峠

17

夏野菜カレー

土かぶせ臉に描く小金瓜
種を植え採らぬなすびの調理法
植える手に甘唐辛子濡らすまま
苗植えるネリの黄花に期待よせ
青嵐揺らす白緑尚飛ばす
陸蓮根上見て育てなんどきも
青天を溶かして注ぐ雫かな
暑き日と浴びせる声は迷信か
熟れ時にニヤリと笑うトマトかな
赤い日と葉の青混ぜた紫色の実
添えた手に頭隠さず深緑
はさみ入れ手の平転がる青い星
光受け輝く野菜に赤テントウ
炎天下畑の成果抱く腕
朝露や熟れたトマトに入刀し
夏の星あふるる種に空を見る
星形の野菜でゲットだ五つ星
夕立風運ぶ香りと刻む音
香るのはルウに詰まったクミンの実
すくうルウ浮かぶトマトの鮮やかさ
ピーマンはわざとざく切り苦くとも
夏野菜辛さに包まれたつ甘み
大暑の日カレーでさらに迎え熱
汗拭う匙は止めない夏の夕
冷蔵庫あまり野菜の夏カレー

18

火やつかむ

その終わりまた蜘蛛の囿の始めたり
陶枕の虎や眼のまるまると
秋蟬や柵の錆びたる海の町
太刀魚の大きくしなる腕の中
猫じやらし遊び足らずに死んでゆく
入浴剤割つて小窓の秋入日
手に鍵が揺れて流星群の夜
冬銀河その譜は未完かもしれず
餌に集く鯉の間抜けを霰かな
初凧や鳥居にしぶく波の音
打つ独楽の刹那にはやし火やつかむ
惰行する寒夜急行床の缶
湯煙に隠るるほどの嚏かな
樹々凍てておの／＼に貌ありにけり
数羽の鳩白し寒暁広ごりぬ
薄氷をそつと叩き割ろうとする
右折する車が二列春の嵐
三月や浅草濡らす天気雨
また今日も話せなかつた半仙戯
卒業子いつまでも手を見てゐたり
春燈やまた倒しみる不倒翁
犬小屋に戸のなかりけり麦の秋
悔いのごとくラムネの玉のみづ色は
魚屋の釣銭濡れて城ヶ島
檻の獅子空蟬を踏み毀ちたる

19

花の唄

さくら一片のせて泥団子の並び
桜吹雪季節外れの歓迎会
花冷や期限の過ぎたヨーグルト
手でまねる庭の木蓮の形
菜の花に埋もれ雛鳥の骸かな
菜の花や夕日の映ゆる二番線
去り際に母と植えたりチューリップ
たんぽぽよ自分にはなき青春よ
いぬふぐり星降る夜の内緒話
紫陽花や夜を満たしてセレナーデ
紫陽花やカーブミラーで気づく友
一輪のガーベラ飾る歯医者かな
夕顔や「好き」は喉元で甘く溶け
川縁のダリア等級はマイナス
向日葵や肩を落として模試帰り
ひまわりや赤白帽の帰るとき
ひまわりの模写に色づく日の光
星のごと世界を満たす花蜜柑
六時のチャイム響いて草の花
コスモスの中へ愛犬消えてゆく
撫子や居眠る隣席の睫
水仙や寸も塗り残さぬように
教卓に誰かの置きし寒椿
「受験」ばかり図書室のポインセチア
革靴に泥はねた跡帰り花

20

開戦日

弟の空に掲げる千歳飴

神渡り民の願いを託されり

午前四時どうどう吼ゆるラッセル車

新刊はもう読み終わり初時雨

運休の知らせ車掌の声冴ゆる

枯芝や力を込める一步二歩

墓石に飛び乗る猫や漱石忌

雪原の車窓や駅弁買い逃す

他愛なき子らの喧嘩や開戦日

十年が経てど変はらぬ冬至梅

バスタオルに移る香りや冬至風呂

寒の入り母より早く目の覚める

二時間の努力無駄にす今朝の雪

営業の頭深々垂る雪庇

水墨画氷柱の落ちる音がする

窓辺から見えるベンチや雪催い

雪だるま二体ぽつんと置いた夜

風邪の子の濡れ髪ぺたり付く額

新型のコーヒーマーカー夜冴ゆる

足跡のぽつりぽつりと残る雪

白雪や清水の舞台から落ちる

冬銀河祖母と眺めて時忘れ

月面のやうに歩くは雪の上

大雪に吸はるる僕の独り言

豺の子の吼ゆる夜母を探したり

21

学校生活

花よ散る卒業式で目をぬぐう
新学期みんな笑顔で楽しそう
卒業式想いを伝える校舎裏
春風とともに鳴りゆくピアノの音
桜舞い新たな友達待っている
暖かな光と眠る授業中
緊張だ1年決まるクラス替え
文化祭淡い望みの片想い
授業中暑くてだらりとしてる君
体育祭クラスTシャツあせにじむ
最終日課題に追われる夏休み
屋上で夜空に咲く花君と見た
昼の空入道雲が立ち上がる
コンクール忘れることない思い出
文化祭秋の気配だんだんと
登下校季節感じる落ち葉道
運動会君の姿に恋をする
合唱コンイヌサフランの花言葉
昼休み秋茄子食べ午後授業
冬の昼眠気を誘う5時間目
駅降りてふと上見れば深雪晴
雪だるまみんなで作り笑顔咲く
粉雪が地面については消えていく
雪積もる朝の登校滑る道
寒空と金糸魚の御来光

22

甘く煮る

戸を開けし女鈴虫高く鳴く
秋日和パンに蜂蜜輝きぬ
鉛筆の木屑葡萄に落ちにけり
コスモスや左を向いてゐる埴輪
毒茸や知らずして踏む紐の先
愛嬌のあつて日陰に楓かな
毛布花柄魚類図鑑の折れてゐる
すき焼きや写真うつりの良き男
火の番の父の法被についていく
制帽にただ一点のみぞれかな
初明り劇団員の駆けてゐて
伊勢海老の腰の美しキシタン
薔薇の芽や机にメモの散らかつて
古本にビニール薄し春の月
雉の目やデイスリーブスの駐車場
囀や塩のみ振つて生野菜
佐保姫の退化してゐる喉仏
たんぽぽや玩具の指輪割れてゐて
城址より町の開ける臯月かな
千年の歴史杏子を甘く煮る
老鶯や根の深さまで穴のある
対岸に打水のあり舟のあり
ベランダに飛びついてゐる蝉の殻
髭剃の電池の匂ふ麦茶かな
墨審の顔映されて茄子に箸

23

喰らふ

給食の前向く机初桜

桜餅大学生協のチラシ

春風や木綿豆腐の水気切る

山影や田楽焼のある旅館

かまぼこを摘み食ひする花曇

春の宵ホットケーキと罪悪感

綿菓子に舌に消えたり春惜しむ

朝ドラを見つつ昼食の素麺

葛餅の六面全部蜜ひたす

金メダルラッシュが何だ心太

夏祭り父の屋台の五平餅

冷奴十五分後に客の来る

桃冷やすアイスボックス潮に濡れ

電話出る前にデラウェアを抓む

父親とラーメン巡り秋の昼

仏壇の林檎の側の手紙かな

ピーナッツ名盤を聴く宵のうち

曙や聖菓売り場のディスプレイ

寄鍋を囲む我らの隅に猫

毒舌のタレントが好き蜜柑剥く

晴朗や雑煮祝ひて祖母の家

元日のコーヒーゼリーミルクなし

雑炊の冷めたるころに起こされて

スーパリーの面接終へて根深汁

年の豆十八才の頼りなさ

24

靴

コンバース夕焼け色に染まってく
夏日和サンダルはいてコンビニへ
雪積り運動靴の跡がつく
ローファーとともに始まる春が来る
長靴の出番近い雨の音
夏祭り下駄と共に始まりだ
クリスマスあなたのために靴磨く
寒い冬白い地面に足跡だ
お揃いのサンダルはいて海へ行く
長靴で水たまりなんかへっちゃらさ
運動会心も靴もハイテンション
靴履かず芋を追いかけ走り出す
梅雨の日々気分も靴も濡れていく
遠足におニューの靴で靴擦れだ
バレンタインデートでヒール無理しすぎ
こたつ抜けスリッパはいて雪を見る
夏が来たサンダルとともに始まるぞ
夏の雨靴を履いて晴れを待つ
秋の道紅葉を踏んだ赤い靴
長靴で雨の中を走り出す
新学期汚れた靴を買い直す
秋到来食べ過ぎたから靴降臨
寒い冬あしがじかみ靴パンパン
桜咲くピカピカの靴一年生
春が来て校門抜けて走り出す

25

靴

スケートでつるつる滑るとこまでも
新品の靴履き向かう入学式
さくさくと夏草を踏むスニーカー
春になり新しい靴で進みだせ
サンダルで夏の始まり感じ取る
夏休み下駄と浴衣でお祭りへ
サンダルと帽子をかぶって虫取りだ
入学式新品の靴と初登校
コツコツと響き渡る夏の朝
天気をね靴を飛ばして予想した
振り袖姿足元響く下駄の音
雪降る日ブーツを履いて雪合戦
履き潰す気に入っていた白い靴
パタパタと海の中を大冒険
夢のJKローファードビュウで夢の青春
春が来たホームの響くヒールの音
お気に入りのサンダル履いて出発だ
振袖と下駄履き向かう成人式
ビーサンと浮き輪を持って海水浴
成長し小さくなった靴を履く
私の靴で落ち葉をふむ音いい音だ
始業式ピカピカな靴で幸せだ
靴と共に春の始まり出会いの始まり
京都旅行紅葉バックに下駄の音
体育祭スニーカーは泥だらけ

26

国境

軽鴨の羽を拾ひて斑雪

亀鳴くか通知音かと思ひけり

窓拭きの跡を拭きをり木の芽風

鞆に立ち見る母に旋毛かな

眼前の尻に濡れある潮干狩

オロナミンCが美味しくなれば夏

風薫るキウイ畑の廃車かな

花は葉に流れる水に陽の疎ら

勝手口梔子の花たそがるる

古本のカバー外して青林檎

炎昼の昨日のままの砂場かな

山笠や今日はじいじの晴れ舞台

拍手して二の腕揺るる残暑かな

秋夕焼参道は海より続き

きりぎりす裏の空き地で紙芝居

汽車は国境を越え続ける九月かな

厨房にジャズの染み入る長き夜

海洞の底てらてらと翁の忌

ストーブの付かず離れず香る塵

くさめして背中あたりがかゆくなる

握られし銭温みある初御籤

靴紐の金具のひかり福寿草

一声のスコンと抜ける初芝居

冬空にがつつくメンチカツサンド

春近しぬるま湯すうと喉を抜け

27

時を越えれば

今昔変はらず気持ち移る月
リボ核酸満ちスープめく春の海
青嵐プテラノドンは空をゆく
山霧に土偶の足を砕きけり
梟の見守るマリア様の御子
埴輪の目色なき風を受け止めり
夕凧に沈まふ吾つ哀し恋
春光や盧舎那仏いざ開眼す
御来迎餓鬼より救ふ兆しかな
京に戦火あり山鉾は駆け行く
枯草や栄華を遺す鹿苑寺
姫若子の臨む土佐湾うつ田姫
白南風や新大陸を探す船
かの燕二刀くぐりて巖流島
新品の備中ぐわや山笑ふ
何思ふ踏絵のイエス・キリストよ
大江戸の歌舞伎座けふも熱帯夜
鳥の恋雅宴画前に眠りある
男衆の担ぐ狼一匹
蚊遣火や厚きブラウン管テレビ
冷戦は終結したり夜半の冬
春紫苑バブル世代の金に萌ゆ
潮焼けし顔にうすらとマスク跡
新惑星にて寒林へ降り立ちぬ
初晴れよ宇宙滅亡してもなほ

28

手弱女

君の手は私専用春暖炉
春の露今日から始まる恋心
窓際で勿忘草を見る私
春の風あなたと共に感じたい
君想う桜と散りぬ恋模様
恋冷めて今更気づく夏の雨
夕顔に赤く染まる初恋や
胡蝶舞うふわりと薫る君の記憶
浴衣着て無邪気にはしゃぐ君の横
初紅葉秋が来たねと歩く道
君と見る夜の静けさ上り月
星月夜今日も想う愛する君
焼き芋を頬張る君の頬明かし
枯葉散る私の心砕け散る
聖なる夜隣に居ると君想う
君の背を追いかけて落ちる桜かな
スイカ割り子供のころの遠い夢
初紅葉あなたと二人で見に行きたい
手袋を二人で一つあつためたい
スイカ割り約束したまま散った恋
遅桜君への想い共に散る
花火より見とれてしまう横の君
君想ひ手花火と涙共に落つ
我祈り君に会いたい流れ星
手袋を君と半分雪の夜

29

秋

降ってきた空一面の紅葉が

ススキがねみんなと一緒に踊ってる

きれいだね風吹く紅葉もあなたもね

紅葉と秋刀魚の匂い秋が来る

紅葉の赤いじゅうたんきれいだな

ススキ揺れ秋の夕暮れ帰り道

食べたいなウサギがついたお餅をね

食べ過ぎちゃう熱々お芋をパクパクと

サンマ君とつてもとつてもおいしいな

森へいこう紅葉を見ようきれいだよ

秋の葉は色とりどりのアクセサリー

焚火して心も芋も温まる

さんまさんさんまのにおいを運んでくる

焼き芋を食べ過ぎちゃってあきがきた

寒いのかわからないときはだいたいあき

モンブラン大好きだから食べたいな

栗美味いけど殻剥くのめんどくさい

普段なら月見ないけど月見する

赤々と茂る紅葉すてきだな

紅葉は色とりどりのカーニバル

昨年も秋を感じる金木犀

秋の風おいしいにおいとやってくる

帰り道月も落ち葉も沈んでく

夜ごはん秋刀魚を食べて骨食べる

となりのきいい身になってるかきのきだ

30

小鳥

旅はじめ高等のカップルは行く
道を切り抜け冬虹の罫があり
つま先や五歳の頃の雪達磨
ぼくの手は白鳥を切るはさみかな
冬眠や犬は骨ほね食べている
絶対^に廊下遊びの焚火の子
馬鹿の室(むろ)なのに満点山眠る
理科室の暗い光の風車
黒蝶は虹蝶になる未来から
桜傘巡りめぐりのさくらづけ
元々はごきかぶりより油なし
むらさきの金魚の機械ありにけり
水馬や楽しみの日は服を脱ぎ
子どもらの命とあそび蚊のイラク
いちご食べ絵本の青い一ページ
雲の日は近くに匂い花氷
秋扇や情熱のちからをつけて
女郎花人生の風がとられた
変化すれば時代のひと原爆忌
震災忌コンビニの百のジュースかな
銀漢の子どもむらさき行方不明
赤ちゃんはいつも不安や昼の虫
秋の暮見渡す人の遠くまで
こぼれはぎ恋人は幸せだった
ぬくもりの小鳥の羽は白い空

31

食

桜餅上を向いたら春模様

散歩道頭を出したふきのとう

かき氷みんな違う舌の色

夏の日の涼しさ感じる心太

冷やし瓜色鮮やかな紅だ

深緑がキラキラ光る氷宇治

アイスティードアベルの音重なつて

青春をクリームソーダで思い出す

銀杏の匂いが香る帰り道

寒い中みんなで食べるさつまいも

カレーにはジャガイモいなきや始まらない

長芋はとろろにするのが1番いい

桃は秋意外と知らない秋の季語

食べたいな石焼された焼き芋を

道端の落ち葉の中に銀杏みつけた

サイダーに透ける青空キラキラで

アイス買い2人で歩く帰り道

夏祭り彩る光に吸い込まれ

焼き芋の湯気ほかほかと頬張る君

秋刀魚焼く匂いにつられ歩き出す

餅食って一気に増えた体重が

お正月書くのがだるい年賀状

雪降って起きれなくなる冬の朝

18歳人生最後のお年玉

お年玉物欲お化けすぐ消える

32

青

夏に飲むあなたを映すガラス玉
風鈴の音色が運ぶ涼しさよ
夏の滝心洗われガラスのよう
五月晴れ見上げる先は水平線
空青くジリジリ太陽夏到来
海を見て寂しさ募るブルーハート
天の川せつなきひらひら恋の川
透き通る青い海と君の瞳
青林りんりんりと勇ましい
夏の夜君と競った金魚すくい
15の夏はしゃぐ君と水しぶき
澄み渡たる快晴の空じりじりと
寒い夜雪景色と並ぶ君
ガリガリ君頬張る君と夏の空
町メロデー―青山テルマ?聞こえるね
朝昼晩みんなを導く青信号
海見ると鏡のように映る空
かき氷青い舌見て笑いあう
氷点下真冬の空白い景色
心地よい青空広がる夢の中
川沿いに花火と笑顔咲き誇る
はしゃぐ子の手には二つの水ヨーヨー
炎天下海に飛び込み水しぶき
ぴよんぴよんとカエルの音が梅雨便り
ピクニック雲一つない青い空

33

青春のひととせ

目の裏をピンクが濁す雪別れ
靴を履く耳をすませば雪解音
地のキャンパス白溶け芽吹くうすみどり
春風は草を踊らせ通り過ぐ
花弁ふみシートひろげて桜みる
春の雨散らずに残るある桜
カラフルに染まる紫陽花土の下
駆ける君冷たいグラスと玉の汗
綿菓子にまわりついた涼風の色
熱帯夜冷えたラムネで二日酔い
帰り道横目に映る蝉骸
夏の日の思い出色褪せた押し花
十五夜の餅つく兎に見とれつつ
恋焦がれ薫るコスモス笑う君
名ばかりの読書の秋と増える本
か弱さを憂い見つめる梅紅葉
寂寥は降るもみじ葉と鹿のこえ
銀杏散る路頭に迷うメッセージ
雪帽子忘れた昔を取りに行く
白い庭ひとり佇むゆきだるま
ひと仕事炬燵でアイスむく蜜柑
巣に帰りアランニットと電撃戦
初日の出道は金色空は青
寒空にカイロを放る手冷たくて
白い朝うつる細氷寝る私

3 4

折しも

風薫るカーテン弄ぶように
百日紅幹のうねりに眠る犬
灯台の輪郭淡し夏至の夜
南風や空のスポーツジャグ提げて
夕風に紙飛行機が溶けていく
月下美人夜のとばりに佇みぬ
サイダーの泡のはじめて彼と別る
水紋をただ見つめゐる萩の原
新蕎麦や老舗旅館の婿養子
無人駅裏に広がる花野かな
鰯雲鼓動と球が速くなり
飼猫の膝から降りて黍嵐
古傷へ染み入る苦き檸檬の香
冴ゆる朝琴の調べの響きけり
冬菫リップ蕩ける洗面所
冬日和同時にスキー日和なり
夕空を映り込ませた氷柱かな
駅前溜まる吸い殻寒夜かな
糸握る手に手を重ね風揚げる
白蝶や手形の残る砂の山
愛猫の欠伸のひとつ沈丁花
緑児の頬の艶やか桜餅
春雷やぜんまり止まるオルゴール
朧夜に映る露天風呂の花
使用済み肩たたき券春深し

35

風の記憶

自転車の籠に斜めや麦わら帽
水鉄砲打って打たれて濡れし髪
傘閉じて伸びをしてこの梅雨夕焼
握りたる切符の黒き面に汗
シャーペンをまた持ちかえて日の盛
夏深し机合わせて千羽鶴
七十六年前の空にも蝉の声
中敷のロゴ消えかけて夏の果
初秋のイヤホン越しの風の音
畳踏む素足の指に秋の風
祖母の家の匂いと思う零余子飯
自転車を並べて歩く秋の夕
演説の襷の肩に来る蜻蛉
蟪蛄を掲げて君は無敵なり
シユート決め掲げた拳秋高し
秋うらら廊下に友の背を叩く
誰もいぬ電話ボックス秋の風
水飲みしあとの舌先冬近し
冬めくや鳥居を栗鼠の駆け抜けて
寒風や鳩立つ池にのぼり旗
冬夕べいつも金星探す癖
すきま風ちらりと猫の尾の見えて
鍵盤を沈めて指のかじかめる
遊歩道聖夜の明かり途切れなく
目を落とす液晶氷る君来ぬ夜

36

片思い

ばれないようススキに隠す僕の恋
消したいの雨に流してこの想い
卵より私を見つけてイースター
寒空で君を待つ我息白し
クリスマス忘れないこの気持ち
汗ばんだトマトのような君の顔
君見ると飛んで火にいる私かな
新学期春めく青空君の横顔
恋心花火のように碎け散る
春風で髪なびく君追いかける
散る火花見上げる君に一目惚れ
頬と葉が赤く染まる秋の昼
紅葉狩り葉よりもずっと君が綺麗
雪合戦雪も心もキャッチング
桜舞う並木の中の君思う
できるなら君と行きたい夏祭り
バレンタインドキドキしすぎて倒れそう
返してよ初夢の中の恋心
涼しげな君との帰り初夏の夏
この気持ちトンボのように飛んでった
サンタさん欲しいの伝える勇氣だけ
思い人我の思いは降り積もる
覚えてる君と見上げた星月夜
思い寄せ卒業式に桜散る
夏祭り人多くても目にとまる

37

先輩

春の日に失う前に先輩へ

夏の時期先輩に会うためダイエット

いつまでも背中追いかけて春が来た

シヤリシヤリと先輩と見た紅葉忘れない

先輩と話すことなく春が来た

先輩と思いでないまま春が来た

先輩の名前知らずに春が来た

先輩に覚えてもらえず春が来た

卒業式なれるか私はあの背中

雪解けて近づいてくる別れの日

桜咲くその頃あなたにもう会えず

桜舞う季節に君と別れ来る

雪も溶け気づけば三月卒業式

忘れないあなたの活躍体育祭

春来たなら桜舞い散り別れの日

忘れない先輩旅立つ卒業式

部活動先輩憧れ夏が来た

暑い夏朝練終わり部室へと

スポドリを自販機むかいおごられる

桜散る最初の部活緊張だ

春向かい新たな門出おめでとう

たんぽぽを眺める姿美しい

桜咲く三年生の別れ来る

体育祭先輩たちの活躍姿

暑い夏練習姿かっこいい

38

凜と

地球儀にチヨークの粉や冬に入る
悪口のマスクに染みてゆく氣して
凧や路駐の軽に映す顔
速達の椪柑置いてある厨
ブラウニー焼く祖母のゐて日向ぼこ
煎餅の欠片かじるや隙間風
蜜柑置き家族会議の始まれり
鼻歌の調子はずれや冬うらら
煮卵の楢円美しおでん食ふ
廃校のこと人づてに年暮るる
室の花洗濯物の山崩す
すき焼きや父の遅れること五分
おづおづと七味かけたり晦日蕎麦
年賀状文字のこなれてゆく深夜
初詣あの子に会えたが末吉
たわいなき友の話や初えくぼ
着ぶくれの人並びをるラーメン屋
大雪や氣持ちばかりの傘を差し
葱凜と飛び出してゐるマイバッグ
ぽつかりと浮かぶ街灯雪しきり
友に手を振りてイヤホンの冷たし
順々に削る鉛筆冬の夜
三角の石を口とし雪達磨
登校や雪掻きの人点々と
ハーレーの後ろ姿や星冴ゆる

39

鳥

アカペラの響くチャペルや鳥の恋
囀や猫がしきりに爪立てる
鳥の巣や朝の奮闘吾の癖毛
屋上の錆びたるフェンス鳥雲に
吾に羽を広げる孔雀風光る
あたたかや鳩の見つめるメロンパン
脱走のエミューの訃報花吹雪
さあ寝よう鳥の鳴き出す夏の暁
子別れの鳥やふっと母のこと
青鷺の飛び立つ水面月緩む
青田道鴉と歩幅合わせつつ
太陽の匂いむんむん夏燕
軽鴨の親子の後に下校の子
焼きたてのクロワッサンや小鳥来る
吾はマジシャンぱつと散らせる稲雀
この町の変らぬ川や鴨来たる
翼搏ち万羽の鶴の飛来かな
祝婚やしげく尾を打つ石叩
チキンナゲット囲み勤労感謝の日
羽毛コート路上シンガー愛歌う
臍の緒の絡みし双子鳩の渦
梟に闇の重なる無音界
大晦日のライブや吾は鳥になる
鼈甲の櫛に舞う鶴お正月
空高く突く羽子時が止まるよう

40

柘榴は青し

春光やカーテンの裾の短し
ネクタイのドット数へる春日和
上履きの裏で蛙が死んでいる
桜降る割り箸の鳴る欠片散る
麗らかや猫と布団に沈み込む
麦の秋ルーズリーフを継ぎ足して
左手に握る三〇〇円と汗
緑蔭には異国のしおりだけがあり
蛍火に囚われてゐる御霊かな
朝寒やカーテン開ける母もまた
柘榴は青し髪を十五センチ切る
新蕎麦や愚痴も惚気もひたしつつ
麻醉抜け親知らず抜け秋暑し
輪郭の赤になりゆく秋の暮れ
三日月の刺繍の金糸広島忌
唇の皮剥き君を思ふ冬
ストリーブの匂ひの祖母や冬に入る
凍星を背負へる猫の尾は白し
悪口の笑へてしまふ古日記
数へ日やカーテンをもみ洗ふ朝
辛いのも甘いのもよし鏡草
初御空ラリーの度に映り込む
フローラル香るカーテン初鴉
んの札の行方の知れぬ歌留多かな
泥拭ひ投げつけてまた拭ふ手毬

41

日記帳

呼んでみる友の名前は秋の空
半分は数学の子や秋の暮
天国の祖父に会いたい小鳥かな
空っぽの仮面を被れ流れ星
小鳥来る八か九の風の鳴るまで
見るうちに梨の瞳の薬より
風はなく胃が弱くなり芋の露
足音の痛い痛いよ秋高し
圏外の晩秋の線つながらぬ
北向きの部屋の匂いの炬燵かな
冬の夜はさいたま日記書きにけり
オルゴール初雪の白鳴りだして
水色の少年の手の蜜柑かな
雲の上イニシャル割っている冬至
成人の日上野駅まで飛んでゆく
整列の冬こだちは闇を待ち
返納の免許をみつめ雪明り
うたかたは乱の世のなか春の朝
にせものに言われるがまま春うらら
足元を隠さず根っこのさくらまで
半分の家はわらっている苺
あいなめや二重にあこがれているか
いつまでも再会までの五月空
さみだれに悩みとともに映画かな
片かげり道のりつづき歩くなり

42

青春

初春の頃今か今かと電車待つ
春風に髪の毛揺れて歩み出す
卒業後君とカンパイ木の下で
春紫苑道に咲いたら思い出す
顔と名を必死に覚える新学期
人見知り話かければ新学期
止まぬ雨私の心も雨模様
下箱が水で輝く梅雨の朝
夏休み紙に染みる僕の汗
夏火花降の君の笑み照らす
灼熱の一筋な目が君を射す
僕の恋線香火花灯もらずと
家を出て蝉が奏でる通学路
夏明けて日に焼けたねと君の言ふ
電車なか光かがやく夕焼けで
薄紅葉舞うには少し早いかな
夕焼けが焦がれる心描写する
とんぼ飛び部活の仲間増えていく
夕闇の教室にさす月光り
紅葉降り地面赤色飾りなる
時雨降りした一面に冬の虹
手をこすり寒さに耐える駅ホーム
かいろ持つ手から伝わる暖かさ
君と見たい光輝く白い世界
初夢が現実なれと願う空

43

四季

猫の恋まだ君の目に焼きつかぬ
残雪の寒さが残るサクラソウ
雪しろの一足先に知らせかな
春の霜旅人は遠くまだ帰らぬ
春が来る苺ミルクの甘い恋
入学式友達できる不安だな
さくらみて希望にあふれる新入生
春景色そのなかすこしのおきみやげ
宿題が終わらずあせる夏休み
こぎつねや宙駆け回る星彩あたらず
ひまわりや勝ち目なしの明るさ勝負
春終わりにアカシアの花咲き誇る
サンガラス色が変わった夏の色
部活後にアイスクリーム気持ちいな
制したり日本ダービーレイデオロ
おいしいなみんなでたべる焼き芋は
おたがいがいとこどろぼうれもんすい
雪だるま自分も転がり雪だるま
こごえても素手で作る雪だるま
お正月みんなが集まり書き初めだ
水凍ゆキツネも熊も巣ごもりや
木枯らしや抱かれる寒さ耐えられず
冬の朝寒さにこごえる雪だるま
春近し走りまわる子供たち
冬の星凍える寒々眺めけり

44

天気

雲海の中を風切る春雷や
晴天の空に浮かぶは朧月
小雨降りの濡れる木漏れ日藤の棚
落つる花ひらりと舞うや花衣
黒い雲光り輝く雷鳴が
梅雨空に色ゆたかな傘の花
雨曇りかなしさつのる梅雨の夜
五月雨に濡れるアジサイ眺める午後
じめじめと湿気が続く梅雨来たり
夏の世に雨乞う者の静けさよ
群青の空の高に高々雲の峰
日中空見上げると鰯雲
夕立が空に浮かぶ秋の空
金風やほのかに感じる秋日和
空泳ぐ儂き白き鰯雲
静寂や紅葉の山に響く雨
寒月や真夜中照らし貴石かな
朝寒のスーパの湯気に浸りけり
侘しさに秋時雨降る彼岸花
冬空に森閑と降る囊かな
コート着て空に広がる雪模様
寒い外芯から凍る冬の雨
雪どけに心ゆるむ春隣
落ち葉舞う冬を知らせる風の音
冬の空心移ろふ小夜時雨

45

春夏秋冬、

合格か不安を持つて卒業す
雪割草始まりを告げる春の花
朝起きてとりの鳴き声桜木へ
春風に運ばれてくる桜の花
入学式緊張とれず教室に
桜木の鳥の鳴き声うつくしき
水分を蓄えつつも渴く喉
日が沈み心落ちつく夏の月
賑わいも花火とともに静まりて
海の音涼しく聞こえ入り込む
群青に染まったところで海水浴
暗闇にうつつすら光る蛍かな
秋の暮父の横顔黄金色
木々の緑赤や黄へ色づく紅葉かな
かさかさともみじをふむ音鳴り響く
七夕に涼しい風と願う夜
灯籠に思いを込めて夜の川
楓の葉紅の顔美しき
寒い夜空の三角美しき
紅色の山茶花散りて白きかな
帰り道北風とともに雪が降る
冬の朝辺り一面銀世界
朝日さす部屋の窓辺に氷柱かな
元日の朝の寒さで気づく冬
つらい朝つららつらなるつらい冬

46

冬

初デートカイロ片手に君をまつ
雪だるま扉の横でお出迎え
雪の中煙草を忘れ君またす
雪合戦熱中しすぎて雪とける
スキー場四年ぶりの感覚か
つやつやと輝く雪は鏡餅
授業中かまくら作るやばいやつ
朝つゆが自転車の上凍りつく
窓の外冬霧に写る君の顔
冬の空部活終わりにオリオン座
オリオン座瞳に光る夜更けかな
毛布から顔だけ少し白い息
かいネコが丸く固まるコタツかな
しみわたる家族でおでん母の味
初日の出ここごえる朝をてらしてく
お正月広がる香り今朝も餅
気づいたら年賀状の文化すぎていた
外套の袖を掴んで染まる耳
鈴の音とポインセチアの赤光る
塩鱈と甲斐性なしの僕の酒
冴ゆる夜影が濃くなる冬の月
凍蝶や冬終わるまで夜着を巻く
庭に出る凍滝の如し長つらら
寒いねと吐く白い息にこだまする
夜神楽に豊穰祈り春を待つ

47

春夏秋冬、

街中がピンクに染まる桜かな
桜咲く楽しみたいくさん入学式
春がきた出会いと別れ複雑だ
いいにおいあ、このにおいは桜かな
受験はね努力と苦労のかたまりだ
春風に乗せて感じる出会いの予感
春の陽に新たなスタート期得込め
お花見で小さく感じる少しの不安
ぶかぶかの制服まとう入学式
緊張と期得が混じる春の風
部活終わり小さく見える扇風機
夏祭り二人で見たい七の色
海辺にて魂ゆきかう夏の夜
夏の風思い出とともに昇華され
夏の朝風が鳴るよチリンとね
秋の朝おにぎりの香りがんばるぞ
文化祭秋の青春盛り上がる
ちびっ子よおかしはないよごめんだよ
秋の空真上を見るとお月さま
土ほってなにがでるかなあたりくじ
冬の山鹿の足跡なかりけり
グラウンドの端に居座る雪だるま
雪の中火の粉が飛びちるどんど祭
つらつらとつらなるつららつらつら
白ひげが幸せ運ぶ聖なる日

48

恋

ジャケットを羽織るが如く重ねた恋
しゃぼん玉儂く消える片思い
君想う夜の雨激し紫陽花に
満たされぬ恋の想いは夏を越す
月明り逢いたし願ひ字に起こし
春に咲く私の華は桜散る
花火見て思い出したよ笑う君
空見上げ秋の夜長に君おもう
悴んだ手擦りながら空見つけ
夏の夜僕の横だけ照らされず
最後の日伝えられないあの言葉
ぼくの横君のながめる光る花
恋心赤く染まった秋の空
雪だるまずっと溶けるな思い出よ
夏の海きらきらひかる君のよう
ひこ星はおり姫思いはや幾年
紫陽花の君の移り気七変化
ふたりしてゆうやけ空に別れ告げ
ラヴソング夏の終わりに瓜弾け
蒼空を染めしピンクの桜花
来年も君との夏を過ごしたい
夏祭りはぐれないでと握った手
春の中君の笑顔は桜色
そばにいて今夜は雪が降るみたい
赤くなる紅葉のような君の顔

49

人生

はじまりだ産声響く春の朝

桜咲き新たな生命（いのち）の産声が

春浅し指先凍る春先だ

桜の木出会いととも別れあり

春風にあなたの希望とぼくの夢

謎の人慌てて飲む滝の水

晩夏かな赤に染まるは山影色

秋近し夏の暑さが消えていく

夏祭り花火とともに舞い上がる

六日目の弾は最後に何想ふ

きりぎりす同族弔う鎮魂曲（レクイエム）

秋風に揺らぐ広葉きれいかな

落ち葉落ち冬に近づき時過ぎる

夕空を後ろにとびけり赤蜻蛉

恋焦がれ月夜にあなたを思いけり

雪だるま溶けてなくなり時過ぎる

思ひ出よああなつかしき名残の空

雪積もり寒さ厳しい冬の朝

大晦日長き短き締めくくり

寒の朝外は一面銀世界

年明けてお年玉来ずもう歳か

人生を振り返ようとも悔いはない

雪だるま一家に一個置いてある

鳴りにけり涼しく振るまう風鈴よ

「好きだよ」とかき消したのはあの花火

50

学校生活

新入生桜咲く頃顔合わせ
一学期いきなり勉強難しい
桜色気分上がる入学式
学校の案内見ないと分からない
桜散り出会いと共に別れあり
甲子園声援響くグラウンド
先生の声より響く蝉の声
夏季休暇終わり近づき焦る筆
部活動熱中症に気を付ける
体育祭りレーを走って筋肉痛
部活動暑すぎみんな倒れちゃう
夏休みサッカーしすぎて焦げちゃった
登下校車窓から見る初紅葉
眠れない明日はいよいよ運動会
学校でできたらいいな芋煮会
学校に着くまで長いもう寒い
夏すぎて少し涼しくなっちゃった
始まった課題に追われる冬休み
初雪に心躍るよ先輩方
帰り道きれいに輝くオリオン座
校庭にいくつも並ぶ雪だるま
冬休み部活と昼寝で終わったぞ
クリスマス雪はサンタからの贈り物
雪だるま、大きくさせるぞ、もっと降れ
雪が降り、ネコはこたつで、丸くなる

51

青春

春になり入学式だたのしみだ
暑いねと駅のホームで笑ふ君
まどの外紅葉にあう君が好き
雪ふってほほあからめる君と僕
朝おきて強風あおる12月
行かないで卒業の日に泣く私
手花火に恋心のせおちていく
並木道落ちてく葉見てきみ想う
帰り道きみと見つめる初雪を
帰り道汗かきながらチャリをこぐ
冬の夜や月を見ながら君想ふ
桜舞う君への想いは満開だ
花火より君の横顔見つめてた
夏の浜座わる君の手握る僕
私の恋サイダーみたいにはじけてた
卒業や初恋消える春霞む
秋を待つ君の横顔眩しけり
身に入むや風の音なる君の声
恋人や手握り笑ふ星冴ゆる
花冷に返信待ちて月夜かな
入学式あこがれていたJKライフ
夏休み部活ばかりが青春だ
冬好きと言ってみただけどやっぱむり
冬が好き君が言うから好きになる
夏が好き君が言うから好きになる

52

自然

桃の花ピンクの色が美しい
夏の夜涼しい空気と光るホタル
秋の夜きれいな花火暗い空
雪だるま寒い中にかわいそう
うららかや光り輝く春の小道
部活終わり夜空の花火きれいだな
風が吹き紅葉が揺れるおどりかな
冬の空心が冷えて手も冷えし
花満開あちらの方で山笑う
朝顔が庭先で咲く通学路
こおろぎの虫の音が響く夜
朝起きてカーテン開けると雪景色
陽の光残雪かがやき宝石箱
夏の波過ぎるのが早いあの時間
人はみな夢に向う初桜
紅葉落ち秋が終わり口惜しい
ドキドキと見知らぬ顔と桜吹雪
綿菓子も儂く終わる夏祭り
君想う揺らぐ心とススキかな
初詣人肌恋し寒空や
川沿いの桜の色を眩さよ
雨の匂い微かに香る梅雨の日よ
金木犀香り誘われ秋の道
雪どけのしたたる水の冷たさや
赤とんぼなかよく夕夜とんでいく

53

学校

桜咲く不安と期待のクラス替え
夕立ちや学校終わり陽が少し
運動会汗と笑顔の思ひ出や
登校中枯葉が踊る風強し
夏休花火に感動きれいな
ぴかひかの制服嬉し新学期
夏休み部活で友と汗流し
秋風に押されて歩く通学路
寒すぎる学校辛いが脱ふとん
緊張の空気漂う新学期
入学に初顔合わせ汗にじむ
夏休部活と課題で日が暮れる
冬休日短くて悲しけり
学校の休み時間に雪遊び
夏の夜に学校に来て肝試し
アスパラガス巻かれたベーコン美味しいな
入学式高まる気持ちクラスがえ
体育祭裏で開祭される応援合戦
遠出した修学旅行車に酔う
友人と別れの季節卒業式
入学式期待たくさん膨らませ
体育祭みんなで団結燃える夏
夏休み課題に追われ徹夜コース
文化祭みんな違ってみんな良い
卒業式いろんな思い出あふれだす

54

春夏秋冬の朝

新春の気持ちも身体も新しく
まだ寒く地を照らしている黄金色
桜まう思いを込めて遠くへと
夜桜を背にして撮る思い出を
レム睡眠セミに起こされ怒りけり
始まるや新たな朝よ新学期
蝉の声響く悲鳴と合唱か
スイカ割り棒振り回すも割れぬ玉
朝日顔空輝かす陽の力
起こされてラジオ体操皆勤賞
良き日差し落ち葉を照らすゆらゆらと
目が覚めてまつ赤に広がる紅葉の葉
揺れる船網を上げて獲る秋刀魚
鶉の声で起床寒い朝
もみじの葉山を彩る鮮やかに
落ち着くや暖気強まる紅の空
スズムシも夜のために睡眠中
誰よりも早くに起きる霜柱
外暗く夜だと思いつい遅刻かな
光る外雪が積もり静かな世
日も変わり寒気始まる冬の空
まだ暗く白き粒降る冬の空
寒晴れの空に描くば寒い朝
冬の夜降るや降るやと光る粒
遊ばずにこたつの中に犬入る

55

季節

春が来て暖かくなり眠くなる
バレンタインあなたも返して倍にして
春の日の舞い散る桜目に映る
春セーターちくちくいたい繊維たち
桜咲く友達いっぱい出来るかな
春の空風が吹くたびピンク舞う
さくらもちもちしててぱりうまい
前髪が湿気でうねりああ大変
紫に囲まれ幸せラベンダー
太陽は私の天敵紫外線
暑すぎて死の危機感じる溶けちゃいそう
夏休み私の目覚ましせみの声
すいか割り誰が1番上手かな
さつまいも心身ともにあったかい
栗の針ふんでしまつてわあびっくり
紅葉の落ちる姿が泣けてくる
一面に綺麗な赤色りんご狩り
初雪で騒ぐ子供と外遊び
大雪で止まる電車で泣くわたし
北風に凍えるわたしに掘りごたつ
冬の朝離してくれない毛布たち
雪だるま作った翌日さようなら
サンタさんまだかまだかと待つわたし
雪が降りあつという間に年明けさ
雪が降り凍える私ねこのよう

56

登下校

暖かな初めの一步心地よい
春の庭色とりどりの絨毯かな
心躍る桜の花道新学期
桜ちり季節が変わる合図かな
過ぎしやすい素敵な季節に春惜しむ
春風や花びらともに髪ふわり
筍の香り漂う浅き夏
鈴蘭の可憐な姿麗しい
朝早く準備始まる夏祭り
紫陽花の滴る雫目を奪う
通学路気だるそうに蝉が鳴く
澄青の空に光は大三角
衣替え後期の気持ち奮い立つ
帰り道脇道に咲くコスモスかな
空見上げ秋雲大量秋刀魚かな
天の川私は待つよツインレイ
帰り道黄色い絨毯銀杏臭
駅前で社会貢献赤い羽根
凍り出す電車の窓も手も足も
手を丸めそつと息吐く冬が来た
窓の外クリスマスツリー眺めてる
冬深し寒さ厳しい帰り道
霧の中白い息吐き漕ぐ自転車
冬日和終業式に相応しい
冬の星漆黒の空澄み渡る

57

登下校

こちよい春めく道で登下校

あたたかな日差しを浴びて学校へ

下校中初雷落ちて疾駆する

帰り道椿眺める君がいた

鶯の声聞きながら登下校

下校中過ぎ行くものに春惜しむ

思い出や笑顔飛び交う夏の星

黒南風の心に染みるは友の声

陰鬱な見上げれば無数の紫陽花よ

炎天下ゆらゆら見えるは歩道橋

友人と思考し出でるは五月雲

夏の日の蝉なく道を走り抜く

通学路落ち葉と共に歩く僕

肌寒し見ゆるは無数の月の糸

帰り道僕と一緒に残る虫

帰り道聞こえる声はキリギリス

帰り道田守かかしにびびらされ

思い出や輝く笑顔と星月夜

稲ノ穂と一緒に揺れて帰る道

降りかかる落ち葉と共にカーレース

帰り道そだつ育つ稲みてきせつ季節候

道凍りスローに進む交差点

髪の毛が五分でボサボサ神渡し

あと1分ギリギリせめる冬布団

雪が降り車になると頬上がる

58

☆し・よ・く・ぶ・つ☆

山道で小さく揺れる花の陰

雪割草今か今かと雪解けを待つ

帰り道見渡す限り山桜

ネモフィラの影が小さく揺れる道

マーガレット彼に渡すが叶わぬ恋

紫の記憶に残るアツモリソウ

サクラがね散る頃には卒業す

赤色のバーベナ咲くと友を呼ぶ

横になり風で香るは女郎花

浜駆けて素足を冷やす夏模様

送ろうか見送る君へ梔子を

夜になり葉を閉じ眠る？合歡の花

池の上紅葉浮かべて浮絵かな

空見上げ芒の横に写る君

秋の山黄金の街照らしけり

境内に咲き乱れるは萩の花

彼岸花野原を泳ぐ金魚かな

暗闇のほのかに香る金木犀

池の中ふわり漂う紅葉かな

真っ白に柊の花道染める

山の中美しい碧龍の玉

柔らかで果汁が多い晩三吉

雪の日に周りを彩る冬装備

八重咲きで薄紅色の冬至梅

神社にて色が際立つ冬紅葉

59

一年

金木犀花のかおりに秋感じ
寒くなり登下校で雪だるま
てんとう虫四つ葉の花に止まりけり
暖房で学校来てすぐ目つむる
ページェント私の心も光りけり
桜舞う初登校に胸が鳴る
夏の夜空一面に花開く
茜色大空飛び交うとんぼたち
外見るとあたり一面雪景色
氷点下窓から見える小半雪
ぎこちなく身繕いする春の朝
はしり梅雨波打ちはねる愛嬌毛
銀世界寒さ耐えれずはにわかな
教室のすみの扇風機で涼をとる
響かないチョークの音も鐘氷る
友達にエイプリルフール嘘バレた
花の末のいろみな濃ゆし初時雨
空見上げ月にはうさぎ夏の宵
夕焼けの海面きらめく秋月向
人影のにはかに遠し春の月
吹雪いてる自然とみんな距離近く
滝の音耳をすませば落ちついた
帰り道アイスクリームじゃんけんほ
あたたかい春セーターの首もとが
いいにおいおばあちゃん家のとろろ汁

60

春夏秋冬

寒い春桜の香り春がきた
春の朝心地よき風流れくる
日が覚めて雪解けを待つ家の中
新品の初服のそで桜舞う
夏の羽雫飛び散る半ズボン
夏の夜色とりどりの空の華
昼の空波のたたない海のように
甲子園熱さけ負けない球児たち
夏の夜昆虫たちの大合唱
夏の夢花火とともに散ってゆく
ワイシャツに藍色の汗滲む汗
暑い夏セミの鳴き声夏がきた
夏深し慌ててつける日記帳
赤い山紅葉の秋初まるよ
夜長さに秋の訪れ身しみる
外に出て空を見上げて翳雲
色集散るコンクリートに赤の紙毯
ぽつぽつと窓にうつは初時雨
街路樹の落葉がしぐれ冬浅し
冬の空宵の明星輝けり
クリスマス街を歩けばサンタさん
八日吹雪に当たられ頬赤し
花畑いろとりどりの自然かな
寒い冬まっ白な雪早い夜
青い海目の前にして西瓜割

61

学校で青春

桜咲きみんなわくわくクラス替え
つかれはてテスト終われば夏休み
運動会力合わせて優勝なり
雪だるま外からみていた僕たちを
授業中虫の音聞いて寝むりけり
雪の果新たな友を待ちわびる
炎暑の日部活に励み水求む
賑やかな花火恋しい受験生
北風気だるさ共に登校を
初時雨沈む気分と響く声
つれづれに生を感じる雲の峰
春疾風新生活へ運び行く
授業中外をのぞけば秋麗
八日吹指が悴む試験の日
汗をかきギターを背負う夏休み
新しく始まる気持ち春日和
はげみあいあいだにできた夏の夕
秋の声ふめば踏むほどさわぎだす
暖かい中から見上げる冬の空
楽しみでなってしまう短夜に
冬の朝玄関開けたら。視界白
こんにはおやすみなさいいい天気
空腹で食べた粉雪ああおいしい
アリジゴクアリからしたらマジジゴク
寒くなりひざかけばかりかけている

62

物語

友人と同じもの見る春の夢
杉の花花粉とぼして悩ませる
降り注ぐ涙と桜別れの日
入学で新たな道に歩みけり
お花見で古き友との再会を
桃色の花と笑顔があふれてる
紫陽花が吹いて雨降り憂鬱や
梅雨明けに茨の華あり嬉しかな
夏の宵見ると何処か哀しきかな
マーガレット期待を込めて温かい
アイリスに希望をのせて贈り物
別れして哀愁漂う夏の湖
秋のはえ飛ばず動かず悲情かな
憂鬱な嫌われ者の月夜茸
秋の雨晴れない空に疑惧募る
秋園の歌う虫達満悦顔
赤蜻蛉満天の赤に驚異の日
紅葉の木騒めき呻く憤り
水仙や照らされ見える帰路につき
憂鬱な闇夜に光る雪の群
ただいまと言いながら寄るストーブに
寂しさが身体を冷やす神無月
祖母の家帰りを待ったきりたんぽ
朝起きてコートを羽織り学校へ
餅食べて幸せ考え寝正月

63

365 日の幸せ

垣間見る春の木源れ日カーテンや
ウグイスか分からない鳥鳴きつづく
ゆらゆらとかげろう高く坂の道
テレビだけみどりの特集みどりの日
桜見し初恋思う愛は無償
花吹雪時の流れを感じさせ
青い空白い肌目立つ日傘の下
あの人の浴衣姿が恋しけり
飛んでいくシャボン玉にも光る虹
南風滴る雫拭い去る
向日葵が下から見上げる澄んだ空
ワイシャツの色変わりはて夏日かな
君の瞳に鮮やかに写る花火かな
爽やかに走る君を見るわたし
秋の川冷えた空気に澄み渡る
いわしぐも空に広がり下歩く
上り月より美しく光り輝く
新米の甘い香りをつつみこむ
祝福をもらうためにも千歳飴
初冬きて木々の葉が散る名残惜し
冷たさも炬燵があれば愉楽べし
一つ取る蜜柑のおかげで笑顔咲く
台所リズムをかなでて鍋の気配
息白し冬の訪れかじかむ手
雪つもり外出しない初詣

64

ときめく季節

そよ風にふと見上げたら朧月
春まけて蕾膨らむ恋心
輪橋で見とれてしまう花筏
家族旅途中の駅で桜見る
胸はずむ入学式でカメラ見ず
春の日に声裏返る自己紹介
気がつけば立夏の訪れ風が吹く
梅雨の月傘貸す君に恋をした
夏の海新たな出会いに胸高鳴る
アイスコーヒー少し背伸びして飲んでみる
夏祭り少し着飾り君探す
耳澄ます風鈴の音と季節待つ
ふとみれば紅くそまる葉秋の色
晴れた日に紅葉散る道君出会う
星の夜一度の出会い天の川
鈴虫や季節の音を感じる日
見上げたら儂く消えた秋の虹
秋雪や肌で感じる次の時期
初雪が冬を知らせるおくりもの
冬の星きらきら光る風呂の窓
雪降る日カーテン開けるとはしゃぐ君
雪だるまつくつとけるとける悲しさよ
プレゼントあなたを想い糸編む
初詣家族揃って寺へ行く
並外れどこにあるかな寒牡丹

65

学校生活

春の日に出会いはめぐり繰り返す
花時に出会いと別れ思い出す
桜花校舎いろどるひらひらと
外を見て眠気覚ましの春景色
校庭でクラスのみんなと桜狩
桜降る新しい自分見つけてく
青々と生き生き過ごす私たち
授業中窓からながめる鯉のぼり
気がつけば汗が流れる体育館
七色の光が映る窓に虹
窓を開け耳済ませるとせみの声
蝉の声教室まで響いてる
汗流す私を照らす日照りかな
宿題と一緒に残る残暑かな
体育館団結力を見せるとき
体育祭みんなにやどりし目の炎
青空に窓から見える初紅葉
登下校紅葉感じる道進む
薄闇や歩くだけの道雪の中
ニット着て拍手が起きるパチパチと
童心や当ててはじける雪合戦
初雪や思いを馳せる授業中
雪が降る白い吐息と受験時
かがやいて窓から見える雪景色
外見ると放課後夜空にオリオン座

66

LIFE

お腹撫で話しかける夏の夜
手延ばしだっこ求める秋の夕焼
昼寝中起きるなと願う寒の内
腕の中目覚める赤子桜咲き
初めてのアイスクリーム白ひげに
チューリップ大きく描くクレヨンで
五月雨や長靴はいて水遊び
運動会私の好きなハムチーズ
クリスマスツリーの名は私がつける
カラフルな小春日和の小さな背
一等だ若葉も一緒にゴールイン！
卒業新たな生活第一歩
ランドセル大きな背中卒業の日
桜咲く期待を胸に入学す
自主研修秋の野遊び楽しかな
秋空の響け我らのハーモニー
桜舞いこれが最後の行事かな
桜咲き春の季節を感じとる
卒業の祝いを風でお見送り
お弁当学校に忘れしかられた
春の日が家にも入り温かい
初夏の夏初孫生まれおぼになる
秋風や木漏れ日英にオフィスに注ぐ
春向い呼の思い出よみがえる
桜咲き最期の幸福孫の顔

67

Food 俳句

春苺甘酸っぱくて恋のよう
のりまきにのり汁つきの朝ごはん
ふと思うつくしだけにうつくしい
初鰹えさを求めて北上す
噛む毎に時季想わせるアスパラガス
氷水頭冷たく爽やかに
ラムネ飲むただ一色に染まる空
素麺を浸して半ば箸かかる
車から出て肌冷やすそうめんや
腹壊し茴香の花探る夜
砂遊び砂糖をかけたトマトかな
作ろうかいなごの佃煮網持って
満月に負けじと耀く柿の実よ
栗の木に鳥の音響く朝ぼらけ
花やかなさびしい木の下もみじの道
月光り真っ白おもちに降りそそぐ
通学路寂しさ感じるぎんなん木
まちどおしい初鱈くれば鱈鍋や
焼き芋の新聞はがす気はやりつつ
様々な味楽しめるおでんの具
静かな夜みんなでお鍋にぎやかに
声聞けば香りただようやきいもや
キムチ鍋家族で囲む冬の空
帰省をしのりくらりと蜜柑食う
伊勢海老や茹でると真っ赤縁起もの

68

高校生活

春が来て思ひ出溢れる新生活
残雪や次の世界に後少し
春休み宿題なくてうれしいな
授業中くしゃみとまらん花粉だな
大試験目指す頂上ライバルと
夏休み友と部活で汗流し
すれちがう好きな人を見入る夏初め
夏祭りふと日が合って恋めばえ
夏休み毎年宿題終わらない
帰り道あるとき食べたアイスうまい
思い馳す花火線香幻に
蛍見る君の横顔恋おちた
天の川夜空でふたりおどってる
想い人目に浮かびし星月夜
やきいもを買って友と半分こ
学校の窓から見える秋の色
マフラーでうもれる顔もうつくしや
クリスマス友達誘うふっ軽だ
白マフラーあざとい君に恋落ちた
雪達磨儂く解ける恋心
ほっかいる投げ合い体あつたまる
大雪で遊びまわって白くなる
クリスマス光きらきらうつくしや
友達と初日の出見に海に行く
恋人と一緒にスキー楽しきや

69

scene

華の舞う朧月夜にキミと逢う
合格やその筈さえも知らぬまま
この年は入学に向け準備かな
彼岸西風君の背中をおくる日よ
花時の新たな出会い光さす
桜散る校門の前影二つ
帰り道空一面の花月夜
暑い夜に慣れぬ浴衣でキミを待つ
友人と最後に見るは夕焼けか
熱砂駆け友と見つけた僕の夢
兜虫怖がった振りあの夜よ
二人きり暗闇咲く庭花火
百舌鳥の声冷たい風ふく通学路
頬張るは君と縁側スイカかな
あの日見た花火眺むるキミの顔
名月に思いをゆらし帰える日々
秋麗キミと歩いた帰り道
初デートマフラー巻いてキミに逢ふ
この季節君との距離はマフラーで
初デート悴むキミの手を握る
冬椿みなに会えぬや想う余暇
君に逢い色づく心春支度
冬董貴女の帰り待たぬまま
こたつにて猫と私がまるくなる
年終わり締めにと親が夢与え

70

Our Winter Vacation

とき過ぎて期待ふくらむ冬休み
頬ふれる空見上げれば初雪が
冬の空星々が見えキレイかな
冬の風ぬくもり求め人々へ
ぬくぬくとあの誘惑火燵かな
寒い日は炬燵に入りあたたまる
ハボタンに祝福されうれしいな
クリスマス一人で過ごす家の中
クリスマス赤と緑は出番あり
雪景色期間限定観光地
友達と毎朝ふんだ雪柱
寒い夜ふと見上げれば雪が降る
忙しく日々が過ぎゆく師走かな
一年を振り返り聴く除夜の鐘
神様に初のあいさつ初詣
朝早く人々並ぶ初売だ
お正月毎年食べるあんこもち
年越しは過ぎたら迫る登校日
大雪で窓に張り付く子ども達
寒い朝窓一面に雪景色
軒先に作りたたずむ雪達磨
雪達磨みんなで作るたのしけり
朝い朝朝日を受ける氷柱かな
暖かい季節待てない冬董
冬椿耐え咲いている寒い日も

71

青春

春の朝期待を胸に初登校

春風や君と私の髪揺らす

くぐる木々高なる鼓動花吹雪

春の朝弁当作る登校日

夏の日の風鈴ひびく一人部屋

向日葵の迷宮の先波の音

向日葵や笑顔を照らす日の光

夏休み「お前ら行くぞ！」と叫ぶ夜

店並び皆でわいわい祭かな

ゆく夏の夜空に咲く未来の花

花火終わり暗闇を迎えさようなら

火玉散る線香花火終わる恋

日暮れても準備終わらぬ文化祭

秋時雨君から借りた赤い傘

すずむしの羽と奏でるギターの音

月明り君の横顔月下美人

鐘の音夜空に響く大梅日

初日の出晴れ渡る空鳥の群

冬の夜にはく息白く赤い耳

冬の暮れ赤く二人を照らす木々

握る手で霜焼け癒える肩当たる

衝撃に驚き振り向く雪景色

雪晴れの中に残る君の足跡よ

寒空の暗闇照らす空の花

あたたかく制服なびく最後の日

72

日常

桜咲き新たな出会い待っている
通り道蝶舞う今日は映える道
あたたかなコスモス咲かせ家の庭
桜咲き人の笑顔も咲き誇る
並木道あたり一面桜色
梅雨明けの雲ひとつないウエディング
夏空の下でお昼寝気持ちいい
ひざ抱え見上げた先に茄子の花
日がのぼりあさがおさいたいいてんき
海と空太陽光る夏休み
夏祭り空一面に星の花
かき氷頭に染みるこの感じ
向日葵や太陽のようなこの命
肝試し距離が縮まるあと一歩
大空に思ひを託し星流る
あかとんぼ紅色にそまってる
赤い空際立つ瞳はオニヤンマ
モンブラン母の手作りおいしいな
秋過ぎて紅色紅葉木の下に
寒い朝足あたためるこたつかな
冬の日に光り拡がる白い世界
まっしろな道を歩いて雪だるま
ゆきだるまにんじんさしたら完成だ
外出ると向かいの家にゆきだるま
白世界君と2人で冬の夜

73

青春の四季

冬明けのお久しぶりのお友達

桜吹き我だけ一人同じ階

桜吹き留年するは我の友

桜咲き新たな一年頑張ろう

日本史を受けるとすごくうとうとう

残雪のチャリを走らせほらこけた

菓子屋前食べるアイスと垂れる水

遠足でバナナがおやつか深い謎

牛蛙弾くチョークとハーモニー

宿題で頭がいっぱい夏休み

気づいたら予定が部活あれ涙

風鈴が微かに聞こえる帰り道

時が過ぎ夕焼けが差す校舎裏

秋風や落葉舞い散る通学路

空腹に石焼の音帰り道

帰宅してカバンを見ると紅葉かな

窓開けて机に乗ったこの紅葉

秋風が受験を知らせる登下校

衣替え秋を知らせる季節かな

雪降れば終わりの日まであとわずか

一年の終わりをつげる除夜の鐘

冬の空君の手を取り温める

人知れず木枯らしの中咲く花よ

待ち遠し一面の雪が溶けるとき

僕らまた出会えるようにと願う冬

74

折節

入学式好きな服着て自分らしく
春になり野球の時代の始まりだ
開幕戦桜の花と仲間の手と
春になり暖色の服を買いだめる
帰り道千本桜が目を覆う
夏の空ビールの売り子が風物詩
浴衣着てきれいな姿花火のよう
葉月の昼ピッチャーの汗マウンドに
蝉の声緑にひびく夏の昼
夏の夜デーゲームより気分上がる
八月の残暑が襲う蚊帳の中
学園祭秋色彩るファッションショー
秋の空蜻蛉が泳ぐ記録会
秋の夜の空にお団子輝いて
運動会一等取れば夜は寿司
見上げれば空一面の鰯の子
雪の中わざわざ向かう映画館
オリオン座南の空に見える冬
雪降ってマフラーの季節スタートする
にぎやかな初売りの声お正月
窓ふけば霧を晴らして山粧う
ランニング吐く息白く見える冬
こたつ中年末テレビ皆笑う
家を出る冬服買いに母さんと
雪道で自転車漕いでひざ痛い

75

この俳句はフィクションです。

入学式学ラン姿一目惚れ

初デート胸が高鳴り山笑ふ

新学期僕の心も桜色

梅雨はじめ心音響く傘の中

香水の忘れられない彼の匂い

スカールや君の姿に揺らぐ夏

夏祭り僕の心も打ち上がる

夏の海リア充多発要注意

七夕に想い届けと願う夏

花火より君の横顔見つめてる

天の川となりで共に眺める夜空

手を繋ぐ火照る私に秋風吹く

月みつけ不意にあなたに電話する

制服で紅葉探し回り道

向日葵のような笑顔で笑う君

夕焼けに負けず輝く想い人

聖夜祭頻赤らめる待ち人よ

サンタさん今年も願う彼氏くれ

雪の日に貴方といればあたたかい

ストーブや彼の温もり消えてゆく

クリスマス恋人よりも友達と

初デート雪で転んで大笑い

初雪をあなたと見れたクリスマス

君想い夜な夜な作るバレンタイン

卒業式最初で最後のツーショット

76

冬

ギシギシと冬の始まり初霜だ
雪降れば楽しみになる雪合戦
サンサンと降り積もる雪眺めてる
冷蔵庫入って涼んだ雪だるま
帰り道雪合戦だ青春よ
雪合戦手が冷たいな霜焼けや
窓の外眺めていたら雪景色
きらきらと雪の結晶舞い落ちる
コロコロと丸めて作る雪だるま
ドア開けて一面広がる銀世界
除夜の鐘今年も最後の音つける
クリスマスいつ来るのかなサンタさん
年賀状スマホで送る時代だね
正月はお菓子を食べてリバウンド
夜空見て悠々と浮かぶ北斗七星
カシオペヤきらりと光りみーつけた！
空光り駆け巡る星冬銀河
流れ星願いとともて駆け巡る
丸くなりネコと一緒にこたつの中
凍る世界家に帰れば湯たんぽや
寒い冬辛すぎるけどふとん出る
綺麗だね見上げる空はオリオン座
寒すぎてこたつにダイブ食うアイス
寒い冬辛すぎるけどふとん出る
冬になりセーター一枚寒いなあ

77

日常

夜桜や川に一面舞い落ちる
髪なびく飛花とともに目に映す
目線上げ空に舞いちる桜まじ
入学式人多すぎてこわかった
授業中桜が舞い散る窓の外
卒業式あつという間の三年間
だんだんと近づいてくる卒業式
遊び行く予定立てても猛暑やだ
暗くなり今年も聞こえる花火かな
ドア開けて何かと思えば金亀虫
夕焼けを見ながら話す帰り道
天高く雲ひとつない秋の空
十月もまだ決めてない志望校
修学旅行なぜ私たち行けてない
制服で自転車をこぎ落ち葉舞う
美しくどこか寂しい秋夕焼け
金木犀香りめがけかけていく友
暗闇空にくつきり三日月や
枯葉踏み歩くとなる良い音
「いい匂い」母から教わる金木犀
雨降って落ち葉いっぱい今日の朝
夜の雪友から言われたおばけいそう
サンタさんちゃんといいい子にまっています
大晦日家族みんなで笑いあう
冬になりひざかけ命女子高生

78

生き物

初鳥の鳴き声響く明けの空
満開や寒さ感じる初桜
鶯の声にて知らず訪れや
雪解の濡れた道歩く散歩道
春の朝目覚めて気づくパンツの穴
彼方にて泡沫の舞宵螢
炎天の空に蝉の声鳴り響く
今年もと負けぬようにと鰻食う
釣り人や釣りを楽しむブラックバス
カブトムシ小さい子供の架空の武器
夏の夜を一人で歩く帰り道
蝉の声大きな声で訴える
夏祭り暗間に飛ぶコガネムシ
綿津見を巡り巡るは鱈たち
紅葉の枯れ葉まいちる季節かな
陽を求め我れ先に行く渡り鳥
地虫鳴く草むら見ても姿なし
生放送群れで飛び交う赤とんぼ
綿虫よ冬の調べを感じゆく
起床して雲り窓こする雪景色
登校中雪晴快晴虹かかる
牡蠣食べて火を通さずにはらこわす
朝起きて外を眺める雪景色
雪だるま季節外れのムヒアルファ
冬の陽が雪をとかしたアイスバーン

79

学校

0時なりLINEで送る年賀状
寒いなど起きてみればもう遅刻
ペン置いて舞っていたのは棹姫鷹
帰り道競争で割る薄氷
じゃあまたね友と交わす旅立ちの日
卒業手を振る友に目を腫らす
春風が我に知らせる出会い来る
飛び起きて準備したけど夏休み
夏休み久しき友と夜更かしを
享楽後我に返る晩夏の夜
授業中窓から涼風夏思ふ
下校時の秋の夜長に違和感を
初嵐休校の連絡まだ来ない
夏休み課題に追われ最終日
通学路コスモス溢れ立ち話
秋風よ少し感じる登校中
帰り道寂しさ思ふ秋の暮れ
友達と吐く息白い冬が来た
雪舞う日こたつにこもる金曜日
冬休みプリントの山最終日
我慢をと手袋はめる冬の朝
登校中初雪集めてぶつけ合う
旅計画迫るとともに卒業も
登校だ扉開けたら銀世界
下校中冬の空がいと哀し

80

天気

春風やあの子の髪をなびかせる

初雷で春の到来感じとる

雲多く花冷え続く寒い夜

春風が優しく吹いて新学期

あじさいにほたほたしづく梅雨が来た

雨上がりふと空見ればあわい虹

帰り道急な夕立御立腹

雨が降りあじさい光るうるわしきかな

ザーザーと音が響くの梅雨の日よ

セミがなく耳を隠すよ夏真昼

梅雨の空色とりの傘の花

寒くなり時雨に追われ大変よ

外見れば空いっぱいひつじ雲

ふと香る優しいにおい金木犀

散歩中ふと見上げると照り紅葉

秋風でひらひらと舞う赤い葉よ

秋になり紅葉見てたら通り雨

雪だるま子供がつくる元気だな

雪が降るつづく足跡だれのかな

雪景色いつもと違う通学路

氷張り滑って転ぶかわいそう

冬晴れで地面が光るうるわしきかな

キラキラと太陽あたる白い雪

窓見たら外一面が雪化粧

雪が降り子供の声が響く空

81

学生の何気ない日常

口開けて桜味わう1年生

春の虹スマホで写真を送り合う

入学し1ヶ月たち慣れてきた

高総体惜しくもツツジに涙落ち

かたつむり走る私と歩く君

朝寝坊必死に着いてくあまがえる

蒸し暑い早くつけてよ扇風機

夏休み目覚まし止めて朝寝坊

課題多々休みが皆無の夏休み

始業式みんな変わって宇宙人

秋寒の少し寂しい生徒会

部活後涼しき風の秋の夜道

登下校満天もみじ夕日染め

教室の窓に滴る秋時雨

秋雨が私の心も曇らせる

教室の窓から見える初紅葉

冬日和懐炉を持ってば人気者

教室で予定を合わすクリスマス

明けの春授業に頭追いつかず

ゆきだるまべランダならび汗かいた

帰り道準備万端ふきのとう

下駄箱をすみずみ探すバレンタイン

受験前校舎を見ながら深呼吸

ホワイトデー答えの代わりはキャンデーで

旅立ちて桜と笑顔咲き誇る

82

夜

夜ご飯おまけについた苺ミルク
春三日月みなで仲良く良き日かな
夜桜月と花びら交差する
夜遅く合格の為準備する
浮き立って眠れずにいた入学に
すやすやとスノーフレイク眠りゆく
夏の夜グラス片手に星を見る
夏の夜窓を開けると天の川
夏祭り旧友と見る花火かな
知夜や生活習慣大崩れ
寝られない遊び足りない夜半の夏
セミが消え花火がとんだ夏祭り
夏の海月と共に動きゆく
盆休み家族団欒夜ごはん
長き夜たくさん眠り背が伸びる
山の中秋の蛍がぴかぴかと
懐かしむ聖樹を飾るあの頃を
クリスマスおはよう靴下ふれ
冬の夜こたつに入り暖をとる
舞う雪を恋人と見るクリスマス
大晦日夜更かし過ぎ眠くなる
夜食べる年越しそばがとても美味
美しい夜空に浮かぶオリオン座
満月と共に映る神無月
夜目覚め窓に目を向け小夜時雨

83

自然

散った花冬越しすれば春に咲く
春の森なぜか感じる安心感
春の雲遅刻知らず流れけり
初日の出海に反射し美しい
通学時前を見るなり山桜
雪も溶け日も暖かい初春かな
桜の花春風ともに香りけり
帰り道暗がり影にラベンダー
ふと見ればキラキラ光る夏の星
春終わり前を見るなり桜の実
波も荒れ青空広がる夏の海
夕日落ちオレンジ染まる秋近し
秋の夜寝るな寝るなど虫の声
秋の道周りを見ればイチョウかな
初秋の空大きく咲くは花火かな
空虚な音安らぎ深き冬の海
過ぎていく疾風の如く冬の暮れ
五月雨は雨具際立て名人けり
朝起きてワクワクみると雪一面
富士の山誰より上手い雪化粧
雪遊び子供たちみな息白し
窓の外きれいにかがやく雪景色
雪道に何かの足あと狸かな
冬の梅負けず咲いている白と赤
神奈月煌めく星も月の中

84

アニマル

おはようと春に目覚める森のくま
うぐいすや冬の終わり告げる声
ツバメの巣かわいい姿蘇る
猫の恋僕も同じく初心な恋
入学を雀と待った4月かな
桜散る泳ぐ若鮎ピンク川
水たまり蛙の姿見つけたり
かわいいな鹿の子たちの幼稚園
森の中光り輝く蛍かな
朝方に水鶏たたかれ目が覚める
あじさいが魚を見つけ急降下
雨蛙自然世界の天気予報
初挑戦急な川を鮎のぼる
食べ放題雀の家族稲つつく
あなうさぎ落ち葉の下に家つくる
秋鮭を川で狩り取る森のクマ
イノシシよ熟した柿を食べないで
散歩中もみじに夢中我が愛犬
商店街秋刀魚とる猫憎めない
家族の脚狭さに出るこたつ猫
積雪に喜べるのは犬子供
文鳥よ水浴び寒さどこへやら
精米所寒雀たちが待ち構え
電線で寒さふくらむ雀たち
冬飼鳥ビニールかぶせて要保温

85

季節のいきもの

公魚も辛い冬過ぎうれしいな
くらやみで川のほとりの蛍ピカッ
別れ鳥君は今日から一人前
朝焼けと共に写る鶴の群れ
通学路滑る堅雪小動物
暑い日は犬もがぶ飲み水消える
木の上にほほふくらんだリス登場
幹色の毛色が映えるタヌキたち
犬猫に春セーター着せあたたかく
避難する灼熱地獄水鳥も
秋の空ふわふわの毛が恋しいな
白い床足あと付ける北キツネ
お散歩だ犬も喜ぶ春日和
炎天下日陰の中でも猫とける
穴窓ひ君にはとても驚いた
白ウサギ赤い目まさに一番星
車庫の中先客の影子猫たち
夕立の色に隠れる夏蛙
イノシシがよく現れる町に住む
エソシカが山をかけ下り星が舞う
終わりがかな今年最後の桜蝦
嬉しくてプールの水に跳ねる犬
動物が木の実を探しに出てきたよ
こたつ見てまるまる猫が寝る季節
空見れば連なる白鳥飛んでいる

86

学校

桜咲く窓の景色に息をのむ
クラス替えハズレと思う初春のこと
桜散るクラス編成悲しけり
春休み少しワクワククラス替え
新入生勧誘必死な部活動
緊張で鉛筆ふるえる入試試験
五月雨に迎えを待った新たな友
年末年始部活だらけの冬休み
秋風で部活がだいふやりやすい
暑い時プールに入って楽しいな
夏休み部活に励む日々努力
夏休み宿題おわらず徹夜する
炎天下部活が中止即帰宅
下校中帽子にとまるあかとんぼ
初秋のイキリはじめる二年生
登校時汗拭いだし汗を吹く
風薫る部活終わりの帰り道
運動会本番強し我がクラス
冬浅し希望を抱いた幼き日
あと二日早く生まれ冬休み
残雪を見ながら歩く通学路
冬休み雪道滑って転倒す
冬休み短すぎてやることない
冬休み年明けみんなにおめでとう
冬休み行事がたくさん楽しけり

87

木と季節

雪がとけ重りがとれて落ちつくわ
新緑の温もり息をふき返す
桜の木花より団子食すすむ
桜咲き新風呼び込むしらせかな
花咲き空いっぱい今様や
たおやかに木漏れ日揺らす桜まじ
朝風や木にしたたるは走り梅雨
夏景色明媚に花めく桐の花
木の幹のみつもとめ舞うかぶとむし
甘い樹液（みつ）誘はれ来るは甲虫
何事だセミの合唱響きけり
金太郎万緑の木々切り倒す
手弱女の頼染めたりて初紅葉
寒い目のあなたほっぺ紅葉だ
木々揺らし爽籟響かす秋風や
どこいくのおちばとなりて消えてゆく
落ち葉増えまだかまだかとまちぼうけ
木々達や色なき風や閑静な
松の木のそばに生え出すまつたけや
初雪の真白な花降り精もる
雪まといじゅんぱくドレスきかざらむ
枯葉耐ゆ都寂の音聞こえけり
枯木から悲しき模様染み渡る
冬枯れに話す友達消えてゆく
冬の夜雪壁似よる冬木立

88

蒼空の詩

土湿り倒れ潰れる土筆

朝顔の目覚めとともにラジオ体操

桜咲く心も開き友つくる

教室で友とおしゃべり春の空

桜舞ふ出会いと別れを学校で

机の中窒息し死ぬ兜虫

川にあるメダカの学校夏体み

甲子園熱く燃える球児たち

教室でクーラーききすぎやや寒い

夏の雨気分の下がる教室に

夏休み近づくにつれ気がゆるむ

蝉の声真夏の教室響きけり

黄金色の田んぼに突っ込む

食の秋たくさん食べる給食だ

文化祭笑顔あふれる行事だな

学級旗個性あふるる運動会

授業中ふと窓見れば赤とんぼ

空に反射る色付く街路樹

秋空の君が光る体育祭

濡れた手袋石油ストーブで乾かす

冬体み俳句が宿題書きまくれ

雪合戦雪がぶつかり凍えてる

帰宅中雪道ひとりさびしけり

授業中眠気をさそう冬の朝

体育館ストーブの前集ってる

89

冬

クリスマス街を綺麗に染めていく
クリスマス夜までにぎある人々で
赤い服親とは知らぬ弟よ
ぬくぬくとみんなで囲むこたつかな
冬の朝布団が私を離さない
冬の朝寒さにふるえ息しろし
帰り道つるつる氷すべつてく
凍え死ぬ冬は嫌だが夏も嫌
お正月たくさん食べて寝むりけり
お年王もうすぐ自分があげるばん
親戚の数だけでもろえるお年玉
部活後空を見上げてオリオン座
積もる雪白く光って目が開かず
冬の空キラキラ光るオリオン座
恵方巻きしゃべりかけられ悲しきかな
きらきらと光り輝やく冬景色
湖が凍り人でにぎわい割れそうだ
寒い冬ツルツと滑べる手が痛い
肌寒い道路で食べるおでん美味
家の中グツグツなべが温かい
ストーブは必ず消して出かけてね
冬の空上を見上げばオリオン座
そばを食べ長寿を願う寒い夜
雪うさぎ木の実のように輝く目
年越しそばたくさん食べて寝むりけり

90

春夏秋冬

桜木の花道通ればみな出世
新学期気持ち新たに走り出す
うぐいすの鳴き声響き空を観る
アゲハイヨウ庭園華やか多種多様
花開きミツバチ達の運動会
桜咲き樹下を囲みパラダイス
ガキの頃アイスが当たり福の神
男達神輿を担ぎ声響く
雨上がり新居追われるかたつむり
かき氷思わずダンス世界一
シーサイド区区たる水着美女探す
地面然ゆ鉄板上の肉思う
見上げるも拾い上げるも紅葉かな
鹿苑寺赤くそまりし紅葉かな
秋の空鳥居くぐれば猫の森
夕焼けや赤く染まりし美しく
赤々と強くありゆく秋の山
風がなり落ちる炎やたぬき猫
霜柱踏む音楽の授業かな
まばゆいな雪の結晶冬景色
オリオン座囚われてもなお脅威なり
冬の月半宵照らす放出線
年越しそば年変わりの思い出に
ミカン食べ手も夕暮けもみな黄色
初詣赤で止まるか運試し

9 1

日常

桜散る入学式が懐かしいの
春休み宿題無くて素敵だな
美味すぎる三色団子が美味しいな
春の風暖かくなる季節だな
春の露キラキラ光るお花たち
桜の木涼しい風にゆらゆらと
傘持って家を出て行く梅雨の朝
待ちに待ち子供よろこぶ海開き
猛暑の日タオル片手にランニング
夏の朝カーテン開きまぶしい日
人ごみにまぎれはぐれた夏祭り
夏休み地面が揺れる運動部
秋風が吹いて感じるもう秋だ
原っぱに寝転び見上げる天の川
お祭りの夜空に咲いた花火かな
コスモスの赤白ピンク並んでる
寒い日の秋の定番芋煮会
枯葉たち散ってゆくのは風のせい
今は来ずクリスマスでのいい思い出
寝てるだけどこにも行けず年惜しむ
信号待ちマスク越しの息白し
ぞろぞろと歩く人々初詣
冬の朝辺りは白くペットかな
厚着して庭から見えるオリオン座
雪だるま小さいうちに土がつく

92

スクールライフ

桜散り思い出あふれ忘れない
桜咲くピカピカのくつ一階の教室
桜咲きここに始まる三年の春
シラバスの新たなページめくる春
さようなら残雪みつめて電車まつ
春休み明け起床時地獄
夏休み実質一週間
送り梅雨音楽堂でピアノ弾く
窓の外蝉と受ける授業かな
さんさんと太陽照りつけ暑い夏
親友と夜空見上げる最後の夏
ふと見ると葉紅に染まり秋感じ
窓の外目の前広がる紅葉だ
すすきゆれ秋風感じる九月かな
肌寒しそろそろ上着着ようかな
体育祭 Twins のテーマめんどくさい
冬の空月が出る四時帰る道
凍え死ぬ腕組みながら登下校
枯れ葉落寒さ感じる窓の外
神無月ポッキー集めてたべまくる
冬休み部屋にこもってあたたまる
冬休み実質三日
クリスマス色鮮やかな昇降口
どうしても会いたかったクリスマス
昇降口寒さもピーク増える装飾

93

School life

桜咲き親しき友と出会う旅
桜道後ろからくる友の声
並ぶ木々教室の中花見客
空かかる朧月夜の季節かな
部活から帰ってくればすいかわり
ラムネ開けこぼれないやうに笑い合う
夏休みカレンダーがカラフルに
水風船子供的心思い出す
海水浴思い出作りに君といく
溶けていく君との距離と氷菓子
あついねと君と話す炎天下
金木犀どこからも香る良い匂い
秋の夜昔にひたる散歩道
紅葉色そまる私と通学路
友歩き秋分の空つめたいね
帰り道ココアのめば冬日和
霜見つけ友の声して青空見つけ
さむいねと君と話す通学路
ようようとやみに消えたし庭球打
体育館友の腕かり冬ぬくし
夜七時空ながめると流星群
うでを組み親しき友と冬しのぐ
下校中雪の電車でうとうとと
いぬふぐり出会いと別れをともにする
卒業は涙を拭いた濡れた袖

94

青春

桜散る新しき恋花が咲く
友の声炎天下の下汗落ちる
思い出や五感楽しむ食の秋
大晦日仲間とすごし夜が明ける
桜咲く別れの涙美しきかな
西瓜割る部活後感じる涼しさや
秋の暮友と頑張るテスト勉強
三月にお別れ告げる春の空
歌声に響く歓声文化無
夜の街二人で歩く銀世界
新学期舞いちる桜歩みだす
暮の夏仲間と帰る一本道
友達と食欲の秋たらふくだ
初詣今年を賭けるおみくじに
秋の旅友達とみる果大寺
星が降る聖なる夜に連れてって
水たまり映る景色に虹が咲く
純白の空を見上げて呟いた
夏の空星座のようになれたらな
白星が煌めく夜に消えていく
冬の夜空から雪がミルクのよう
熱い夏キミとボクの禁断の恋
星輝く眠れない夜冬の空
雨の夜鏡にうつるぬれた顔
桜咲く自分も咲く初心な恋